

重い生地、軽い生地、和装用から中東などの海外向け、単色からカラフルなものまであらゆる染色に対応できる技術力。それを支える、常に客先を第一に考える丁寧で繊細な職人魂。進化した確かな染色技術に、受注が着実に拡大しています。

Vol.3  
**染色**  
 (浸染)  
**おらだの  
 仕事場**

これらの染料であらゆる色彩を生み出していく



染色の見本  
注文通りの色を出す  
絶妙な感覚が大切

# ほふたえ

鶴岡発

絹のみちしるべ

羽前絹練通信

第3号 2016・夏号

The road to Silk・Uzen Kenren



回転しながら染め上げられる生地



吊し染めの釜を点検する



状態を見ながら工程を見守る

## 精

練された布は、どうやって鮮やかな色に染まってくるのだろうか。その工程は予想以上に繊細で神経をすり減らすような作業の連続である。染料の色はベースとなる染料に差し色と呼ばれる染料を加えて作られる。濃度や配合を細かく調整し、実際の素材を使い小さいハガキ程度の「見本染め」を行う。その確認が済んで本染めへと移る。素材となる布は絹をはじめ綿など多種にわたる。

染める方法としては、生地をロール状に巻き回転させて染料液に浸けていく「ウインズ染め」と、精練のように生地を液に吊るして浸ける「吊るし染め」がある。前者は回転しているので生地がこすれやすく、機械にからまる心配もあり常に目を離せない。後者は、生地が重く力仕事になる上に染料が浸みやすくなるような生地と一定の間隔を開けるなど細かな準備も必要となる。どちらも確かな技術と経験が必要とされる仕事だ。



ウインズ染めのような

## おらだの職人さん Profile ③

客先の品物を一番考えて、一つ一つの作業を丁寧に集中して行うことを心がけています。染色ムラ、色の不平等などのないよう毎回細心の注意を払っています。すべてが基本手作業なので苦労もありますが、現場の皆さんと連携して、今後も誇れる仕事をしていきたい。



練染課 浸染係 係長  
**石栗 芳郎** (平成3年入社)

染色の工程で最も気を配るのは、



染められた生地は乾燥後機械で巻かれ製品化

「染めムラ」を無くすかという点である。染色とは熱い染料液で生地を「煮込む」状態で、回数や時間がかかるほど生地にも負担がかかり傷んでいく。いわば「生地が命を削っている」工程である。だからこそ、染料の配合から温度の調整、時間管理に至るまで細心の注意を払う。「ムダなしムラなし」の熟練の職人技は、そんな生地に対するいたわりの想いから生まれている。

**羽前絹練の主な業務工程**

- ◆ **精練** (絹織物・絹交織物 (スカーフ・服地等) ※2匁~30匁以上まで)
- ◆ **染色** (※4匁程度から)
- ◆ **水洗加工**
- ◆ **仕上げ後加工** (特殊加工業務)

**多彩な特殊加工技術で対応**

- ・オパール加工・樹脂加工・毛焼き加工
- ・オイリング・スリップ止め・ピーチ加工・柔軟加工
- ・UVカット加工・防燃加工・撥水加工・抗菌加工
- ・湯通し加工・湯煮(糊落し)・漂白仕上 など

**お気軽になんでもご相談ください!**





はぶたえ

## 第三号発刊にあたって

羽前絹練株式会社

代表取締役 **阿部 純次**

**羽**前絹練株式会社は1906(明治39)年6月に創立された当地方では最も古い織物精練会社の一つである。

羽前織物として有名な羽前羽二重(はぶたえ)、羽前縹子(しゅす)などの絹織物が輸出されるまでには養蚕業—製糸業—織物業の三分化工程が必要で、織物業の内部はさらに精練過程に区分される。織物精練工場での精練加工を経て絹織物検査場に送り、品位検査後初めて輸出出荷することができる。その意味で精練過程とは織物業の最終加工工程であるといえる。

絹のみちしるべ

3

# 羽前絹練 時の歩み

昨年夏、弊社の企業理念や業務内容、絹織物に関する知識、有数の絹織物産地である地元鶴岡などについてご紹介したいと考え、「はぶたえく鶴岡発」絹のみちしるべ」を発刊してから、今回で第三号となりました。

これまで以上に弊社業務や鶴岡絹織物をご理解いただくための一助として、ご愛読いただければ幸いです。

暑さきびしい折り、ひととき、一息ついてゆったりとご覧いただきますことを願っております。

会社系の精練会社を吸収し地域独占的な精練会社となった。これによって羽前絹だけでなく人絹を含めた鶴岡地域の各種織物に対応していく画期となった。恐慌から戦時下営業状況は、絹織物精練高は恐慌前の1929(昭和4)年が10万疋台であったのが1930年、31年の昭和恐慌期に7万疋台へと落ち込むが、その後回復して1938年には12万4685疋台とピークを記録している。とくに注目すべきは1936年から人造絹糸織物の精練・染色高が加わるようになることである。5万疋台と本絹に対して半分の精練・染色高を占めている。人絹の進出への対応であり羽前織物株式会社とは異なる人絹織物工場と提携して新たな精練染色業への道を開いた。

人絹への対応と染色業への進出はすでに1929年段階で見られ、輸出絹織物染色工場設備を新設し、染色業としての届けを商工大臣に提出している。日本輸出織物染色工業組合連合会が設立されたあと1934年に両毛輸出織物整染工業組合に加入して人絹染色の技術を導入している。1935年下半期には人絹への染色設備への投資を行うなど、本絹織物から人絹にシフトしながら精練事業を拡大していった。

参考文献:金屋・風間創業二二〇年史

羽前絹練株式会社は創業以来、羽前織物株式会社の精練工程を担うものとして風間系企業の一環として発展してきたが、1924(大正13)年3月に鶴岡織物株式

鶴岡絹織物を支えてきた「羽前絹練株式会社」の時代と共に歩んだ軌跡。



観光・風土・自然・味覚

## 豪商の往時の佇まいを今に伝える 歴史的空間に新たに茶室が誕生



### 風間家旧別邸 無量光苑釈迦堂

藩政時代からの豪商として名を成した風間家の旧別邸で、国登録有形文化財。広々とした庭園では桜、萩、紅葉など四季折々の風情が望め、平成28年春には茶室が整備され、新たな名所として多くの人々に親しまれている。

(弊社の関連会社である公益財団法人 克念社が管理・運営する国登録有形文化財施設)

## つるっと冷やか、丸い形が愛らしい夏の味覚

なんぜんじとうふ

### 南禅寺豆腐

その昔、京都の禅寺「南禅寺」の傍の豆腐屋で出会った丸くやわらかな豆腐の製法がこの地に伝わり広がったといわれている。ほのかに甘みがある風味豊かな味わい、つるつとした触感が涼を誘う庄内の夏に欠かせない逸品。



弊社表玄関



## 羽前絹練株式会社

〒997-0044 山形県鶴岡市新海町21-1  
TEL:0235(24)1300 FAX:0235(24)1302  
e-mail mail@uzen-kenren.co.jp  
URL http://www.uzen-kenren.co.jp